

令和4年度 国東市：大分県学力定着状況調査結果（小学校：国語）

1 結果のポイント

領域別の正答率

領域	正答率	
	国東市	目標値
言葉の特徴や使い方に関する事項	73.9	69.0
情報の扱い方に関する事項	62.2	56.7
我が国の言語文化に関する事項	66.7	70.0
話すこと・聞くこと	63.0	60.0
書くこと	70.3	52.5
読むこと	74.8	71.7

- ・領域別では「我が国の言文化に関する事項」以外のすべての領域で正答率は目標値を上回った。
- ・問いの内容別に見ると、漢字を書く問題、言葉の学習の問題（言葉の特徴や使い方に関する事項）で「連用修飾語について理解すること」、物語の内容を読み取る問題（読むこと）で「登場人物の気持ちについて、叙述を基に捉えること」が目標値を下回った。

2 課題が見られた問題と指導の改善事項

（1）言葉の特徴や使い方に関する事項

- ① 【出題のねらい】連用修飾語について理解している。 **3**（2）

正答率 28.0%・目標値 40.0%【知識・技能】

この問題では、連用修飾語と被修飾語のつながりを考えることに課題があると考えられる。

（1）の連体修飾語についての問題については目標値を大きく上回っていることから、連用修飾語は、連体修飾語に比べ、修飾・被修飾の関係がとらえにくいと考えられる。

（例）体育館のステージに、今年度の卒業制作をかざる。
「ステージに」は、どの言葉をくわしく説明していますか。の問いに

- 1 体育館の・・・52.2%
- 2 卒業生の・・・5.9%
- 3 卒業制作を・・・14.0%
- ④ かざる・・・28.0%

そこで、連体修飾語と連用修飾語の違いをおさえた指導が必要である。文節数が多くない文を例文にして、修飾、被修飾の関係を構造的に理解させる。例えば、修飾・被修飾の関係は必ず被修飾語が修飾語の下に来るということを理解させたいうえで、「ステージに」が下の①～③のどこに入るのかを考えさせ、その中で一番下に来る箇所が答えとなることを子どもたち自身が発見させることも大切である。

（①）今年度の（②）卒業制作を（③）かざる。

（2）読むこと

- ① 【出題のねらい】登場人物の気持ちについて、叙述を基に捉えている。 **4**（1）

正答率 47.8%・目標値 60.0%【思考・判断・表現】

この問題では、「おどけて」という言葉に着目して登場人物の気持ちを読み取ることに課題があると考えられる。

指導にあたっては、まず物語の設定や登場人物の関係、場面の状況等からあらすじをつかませる。そして、会話文や気持ちを表す言葉などの叙述をもとに、登場人物の様子や気持ちに焦点をあてて読んでいくよう指導する。その際は場面ごとの読みではなく、物語の全体像を把握しながら必要に応じて叙述にたちかえり細部を読んでいくような言語活動が求められる。

また、物語文の読みに必要な「あらすじをつかむ」「会話文や出来事などから登場人物の関係をつかむ」「人物の心情の変化をつかむ」言語活動、また「語彙をふやす」といった基礎的知識を習得する言語活動を、各学年で年間を見通しながら行い6学年で系統的に力をつけていきたい。

3 指導の改善のポイント

(1) つけたい力に即した言語活動とその充実が図られる単元設定を行う

- ・国語科の言語活動は、児童の目的意識や必要感をかき立て、単元で一貫した問題解決を目ざして位置づけるものである。また、言語活動を通してつけるべき力を児童が身につけられるようにするため、つけたい力及び指導事項を明確にして言語活動を設定することが重要となる。
- ・単元に位置づけた言語活動を成し遂げるため（単元を通した課題の解決のため）には各単位時間が児童にとって意味のあるものとしてつながっていくためにはどうすればよいのか、単位時間のそれぞれの学習活動を、単元に位置付けた言語活動と結びつく、子どもにとって目的や必要性を実感できるものにするにはどうしたらよいかということも吟味することが必要である。
- ・国語科の授業では、教材そのものを学ぶのではなく、教材を通して教材を解釈する力を身に付けさせることが大切である。授業では、これまでに身に付けた力を使って学習に取り組んでいるかということや、今の学習で身に付けた力がその後の学習で生かされていくということを意識したい。

(2) 主体的な学びを促す「めあて」等の設定と指導に生かすことができる「より具体的な評価基準」を設定する

- ・1時間の授業において、学習の見通しを持たせ自分の学びを認識させることが重要である。そのためには適切な「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の設定が必要となる。また、「振り返り」は言葉による見方・考え方の深まりが見え、今後の学習の展望が述べられるものであることが望ましい。
- ・単元の評価規準→指導過程の評価規準→本時の評価規準という道筋で、より具体的な評価規準「B 概ね満足できる」状況を想定する。また、適切な評価の場面や方法も考える。
- ・具体的な評価基準から本時のめあてを設定していくこと、また、評価規準に基づき「C 努力を要する状況」の児童を見極め、「B 概ね満足できる状況」になるよう効果的な支援を行うことが必要である。
- ・個に応じた指導のためには、評価基準の具体化、具体的な指導・支援を指導案等に位置づけるなど、事前準備等も重要となる。

(3) 多様な図書資料等を活用する授業の推進

- ・目的に応じた読み方を身につけさせるために、多様な図書資料等（書籍、新聞、リーフレット、パンフレット、説明書等）を活用する言語活動を行うことが必要である。また、考えを深めたり広めたりするためにも、情報を比較したり関連づけたりして指導することが必要である。これらを支えるためにも、児童自らが多様な図書資料を手取るようにさせることが重要である。

質問紙	「あなたは、この1か月の間に本を何冊くらい読みましたか。」（単位は%）									
	0冊	1～2	3～4	5～6	7～8	9～10	11～20	21～30	31以上	その他
県	6.9	15.3	13.6	12.3	8.0	12.4	13.4	7.4	10.2	0.6
国東市	7.0	16.2	15.1	11.9	10.3	13.5	9.7	5.9	10.3	0.0

- ・不読者をゼロに近づけ、より一層本に慣れ親しませるために、一斉読書や教科の授業中に図書館の利活用を推進していくことが大切である。

(4) 国語科授業で取り組むべきこと

- ・国語科では必要な言葉を使用し、思考を深めることが重要である。どのように思考するのかをきちんと理解させるためにも、既習の語句（例えば「修飾する」「引用」「要約」「要点」など）がどのようなことであるかを理解させて意図的に使用させる必要がある。そのためにも、少なくとも教科書の巻頭・巻末等にまとめられている学習用語はその学年で確実に理解させることが大切で、指導者はあいまいな言葉を使わないようにしなければならない。

(5) 学校全体で取り組むべきこと

- ・漢字や語句、文法、表現技法等の確実な習得には、繰り返し練習が不可欠である。また、使っていくことで定着が図られる。国語科だけでなく各教科のノートや家庭学習等、様々な場面で指導したりすることが望まれる。
- ・様々な力を下支えするものとして、活字に親しむことが必要である。多様な図書資料を自らが手を伸ばすように指導し、全校一斉読書や各教科及び領域において学校図書館を活用していく。そのために、学校司書と連携し、バランスのよい読書指導をすることが重要である。また、学年が上がるに従って、本だけでなく、新聞、インターネット、テレビ、ラジオ等の様々な情報を活用することも求められる。